

## 14 観光のまち

「まちづくり観光」という考え方が、小樽市の観光とまちづくりを実践していくための重要な視点になっている。こうした視点に立つと、まちづくりと観光の両者が互いに支え合う関係でなければならないため、観光のために良くないことは、まちづくりのためにも良くないまちづくりのために良くないことは、観光のためにも良くない、という考えが成り立つ。そうすると、観光とまちづくりが共通の目標や接点を見出す必要が出てくる。こうした考え方は、近年、歴史や自然を資源として活用したまちづくりの必要性が叫ばれ、各地で注目を集めているようだ。

人を癒し、楽しみを与えるための保養、レジャーということが観光事業を展開する上で重要なことは明らかだが、それに加えて小樽市の場合は、以前に書いた理由で社会教育的な目標を達成する条件を揃えている。小樽市内に残された歴史的、文化的遺産は、日本の中の、さらに広く考えれば世界の中の遺産である。地方地自体である小樽市、事業者、市民の皆様は、社会教育的なツーリズムや観光を来樽者に提供できる環境にいる。

現在の日本には、旅先として海外ばかりを重視する人たちも少なくない。自国との違いを知るためにも、外国に興味を持って旅行をすることは非常に良いことだと思う。しかしながら、海外には毎年行くのに、日本の地方には10年経っても数えるほどしか足を運ばない人たちもいる。地方文化に代表される、日本の地域文化に興味を持つことは、日本人としてのアイデンティティを形成する上で非常に有効に働くと思う。日本という国は、各地域の、日本文化は各地域文化の集合体であることを考えると、長い歴史と伝統を持つ地方文化を愛することが、国としての日本やその文化を愛することにつながるという見方ができる。小樽という土地が提供できる社会教育的なツーリズムや観光が、日本の歴史、文化、社会に関する教育の一端を担うことが今後も大いに期待できる。

小樽という土地が、日本の歴史、文化、社会をはじめとした多くのことを教えてくれる場であることを、世代を問わず、知ってもらおう。子どもは若者になり、若者は大人になり、子どもを連れて小樽にやってくる。そしていつか、孫を持つシニアと呼ばれる世代になる。こうした循環にうまく応え、土地そのものが広い意味で、生涯学習のための教師、教材、場を提供してくれることが強く期待できる。

しかしながら、観光とまちづくりにおいて、両者が共通の目標、接点を持つことは、言うはやすく、実際は非常に難しいことであると拝察する。多くの観光客を受け入れようとするれば歴史を重んじ、そこから学ぼうとする人たちだけでなく、ただ楽しければ良い、享乐的な遊びに興じることができれば良いという価値観の人たちが多く入ってくることが予想できる。しかしながら、そのような人たちにも配慮した観光が、小樽の良い点を引き立てる、良質なまちづくり観光につながることは到底思えない。とはいえ、観光収入のことを考えると、できるだけ多くの人たちに小樽に来てほしい。このようなジレンマを抱えつつのまちづくり観光は、非常に困難を伴うものと拝察する。しかしながら、小樽の歴史、四季折々の美しい自然

情景、景観、そこに息づく文化や人に魅了された旅行者たちは、土地に生きる人たちと共通の目標や接点を持ちたいと思っているだろう。両者が小樽の真の魅力、価値といったものがどういうところにあるのかということを考え、接点を見出していくことを期待したい。生活者は、自分達が暮らしているまちに、いつも旅行者がいるという日々を送っている。その点を、旅行者もしっかりと受けとめ、小樽らしいものを求めていくことが、良質なまちづくり観光にとって大切なのではないか。小樽という土地に生きる人たちが、観光を優先にしてくれるあまり、生活をする上で大きなストレスを抱えているなどということは、小樽ファンとしても悲しむべきことである。生活者と旅行者の双方にとって良いまちづくり観光というものを、根気良く、あきらめずに探っていく必要性を感じる。